



うつくしい

そらに

くもが、ひとつもないように

ぼくの ところも

はれていたらいいね

どんなに素敵だったろうねと

暗雲の泥沼のなかどんよりと鬱蒼としたような僕の心は
癒しでも愛でも陶酔でも無いただの「やさしさ」を求めている。

もがくと深みにはまる。

それは、「地獄」という名の人生。

ぼくが、ぼくの人生を愛するナルシストならば

ぼくは、ぼくの地獄を、愛しているのだろうね。

創造

ノートに、文字を創造する。

あ、い、う、え、お。

ひ、ら、が、な。

こ、ろ、す。

別のいのちが、ぼくの幸せをうばっているんだ？

ならば、ころせばいい？

しかし殺すための具体的対象が存在せず。

かといって中二病の如く「世界人類を殺してやる」というまでには
なかなか、至らず。

人生は、命のいとこの、あやとりで。

ひとたび絡まれば、元に戻すのは非常に難しい。

し、あ、わ、せ。

何をもって幸せと言うのかも分からず、

ただ、呆然と、空を見上げる。

阿呆の如く。

あー・・・、そらだ。

くもがながれているわあ。

「くもはどこからきてどこにながれるのだろう。」

誰もが考える事を考える意味は、

空しい心を埋める陳腐な手段が欲しかっただけである。

優

や、さ、し、さ。

誰に優しくすればいいんだろう。

ああ、身近な人がいた。

その人は、普通の人だが、そのひとの内心は恐らく優しい人だろう。
しかし優しくしようとしても、その行為が届く術があまり無い。

や、さ、し、さ。

たった4文字。

今度地面に描いてやろうか、たった4文字を。

するとそれを見た誰かが、ああ、と何か想うかも知れない。

その人が、なんでもないことを、ああ、と想って、
僕がそれを知らずに自分の人生を生きるとしたら、
そういう、すれ違いとか、スルーも、いいものだな。

そ、し、て。

そして、結局何もしない。
自分が臆病なのは自分が優しいせいだと、
自分を正当化してみる。

多分、僕がやっている考えや行動が普通で、

それがごく一般に流通されている「やりかた」なのだろうな。きっと。

あああ。

みんなといっしょ。おなじ。
あまりちがわないかんがえ。
個性とか無い。

ごめんなさい。
それに、安心感おぼえています。

あああ。

他の人とあまり違わない自分って
「やさしさ」に包まれているのかも知れないな。

今度から、人と会ったら
人と自分の「おなじ」ところを見つけて
それがやさしいってことだと
想う事にしよう。

とがるのは、つかれるよ。
消えよう。
優しさに包まれて。

そう、空を見上げたときのあの安心感は
違和感が無い、ってことだったのさ。
いつも、自分でアタマで考えたとおりのアレが、
いつも、アタマで考えたところであって

ああ、そらだな。

ああ、今日の天気は・・・。

誰かも空見て、僕とおんなじようなこと
かんがえてるかなあ。

やさしさ

<http://p.booklog.jp/book/28476>

著者：せいうんですよ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/seiundesuyo/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/28476>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/28476>